

Shikaya Takako
四日谷敬子

夏の ヴッパータール

《ヨーロッパ・芸術の旅》

近代文芸社

四日谷 敬子

夏の ヴァーニター

《ヨーロッパ・芸術の旅》

近代文芸社

〈著者紹介〉

四日谷 敬子（しかや たかこ）

1944年 横浜に生まれる

1974年 京都大学大学院文学研究科（哲学専攻）博士課程修了
京都大学博士（文学）

1974-76年 DAAD（ドイツ学术交流会）の奨学金を得て、西独ポッフム
大学に留学

1980年 福井医科大学助教授

1993年 京都大学総合人間学部教授

1999年10月-2000年1月 DAAD の再招待により、ヴッパータール大学
に研究滞在

2003年 京都大学大学院人間・環境学研究科教授

著 書 『ハイデッガーの思惟と芸術』世界思想社 1996
『感覚とロゴス、ハイデッガーのギリシア的思惟』
晃洋書房 2000
『わたしのヴッパータール』近代文芸社 2000
他、多数。

訳 書 『思惟とは何の謂いか』（ハイデッガー全集 別巻3）
創文社 1986

夏のヴッパータール

《ヨーロッパ・芸術の旅》

第一刷——2003.5.30

著 者——四日谷 敬子

発行者——福 沢 英 敏

発行所——**創**近代文芸社

東京都文京区目白台2-13-2

TEL (03)5395-1199 (編集)

(03)3942-0869 (営業)

FAX (03)3943-1232

印 刷——信毎書籍印刷株式会社

製 本——株式会社小泉企画

© Takako Shikaya 2003 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-7733-7028-9 C 0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

夏のヴッパースタール・目次

第一部

二〇〇〇年夏

ふたたびヴッパースタールの住まいで	5
市民ホールでの合唱コンサート	11
デュッセルドルフのベンラート城	13
ミュラー劇場での操り人形劇「魔笛」	20
ウータ・R夫人宅（ゾーリンゲン）での ベルギッシュ風カフェー	26
ドロテーから借りた本	31
アントワープ	37
ワルシャワ	45

ふたたびドレスデン 63

旅のあと 73

アニー・ヴェーバー・モード店で 76

第二部

二〇〇一年夏

美術館の島・ホムブロイヒ（デュッセルドルフ／ノイス） 80

夏のクーヘン 84

ケルンのロマネスク教会 87

ドロテーのオランダの別荘 97

ブダペストへの旅 111

アーヘンの王宮礼拝堂（プファルツ・カペレ） 117

あとがき

夏のヴァーナル

《ヨーロッパ・芸術の旅》

母
に
捧
ぐ

ふたたびヴッパータールの住まいで

二度目だったので油断したのだ。それに、思いもよらず、申し込んだエコノミー・クラスではなく、ビジネス・クラスの搭乗券を貰えて、安心しきっていたのだ。フランクフルトへはきわめて順調に、定刻よりも一〇分早く到着した。ところがビジネス・クラスの乗客は飛行機を早く降りる。先頭を歩いていたわたしは、デュッセルドルフへの飛行機の搭乗口が変更（というよりも関西空港が間違えたのだと思う）になっているのも知らず、様子が変だ変だと思っているが、A三六番ゲイトで待ちつづけたのだ。ドイツ語がしゃべれないわけでなし、訊けばよかったものを。結局乗るべき飛行機を乗り過ごしてしまったのだ。どんなにフランクフルトという街を恨めしく思ったか知れない。ヴッパータールは、カファカの「城」以上に遠く思えた。家主夫人たちも心配しているだろうと、何とか空港の公衆電話で連絡しようとするのだが、うまくいかない。試みるたびに、着実に一マルクが無くなっていくのに、通じない（家主さん

宅の電話は故障していたのだそうだ。そうこうするうちにルフト・ハンザはすぐ次の便を予約してくれ、やっとの思いでデュッセルドルフ空港へ到着すると、わたしのラゲッジは一つだけポツンとベルト・コンベヤーに残っていた。やれやれ一安心と思ったが、今度はまたまたデュッセルドルフ中央駅へのS電車が大幅に遅れていた。トランクにくず折れるようにしゃがんでいるわたしを、外国人風の男がジッと見ている。荷物に気をつけねばと、塞がりそうになる目をやっとのことで開けながら、へ何でこんな思いまでして、こんなに遠い所までやって来たのかと後悔した。ヴァッパターールへのS電車にもほんの三〇秒で乗り遅れ、住まいへ辿り着いたのは結局昨年よりも二時間遅い夜九時頃だった。日本時間ではすでに夜中の、というよりも翌朝の四時のはず。閑空でチェック・インして以来、前日の早朝からほとんど徹夜で動き回っていたのだ。それでも夏のドイツは夜九時頃まで明るいことを感謝せねば。

住まいに辿り着くと、家主夫人は例によって病院に入っており、ご主人のほうもそちらへ出かけるとかで、へ鍵はお向かいのドロテー・Wさん宅との貼り紙。「何もかもあしたね」と再会の挨拶もそこそこに、ドロテーから鍵を受け取り、やっとなんとこシャワーを浴び、そのままベッドへ倒れ込んだ。不思議なことに、ヴァッパターールに降り立っても、バス停から住まいに向かつて歩き始めても、まだ懐かしさは湧かなかったが、ベッドに入って、マットレスのバネの弾む音、ウェーレンダール通りに車の流れる低い音を聞き、洗濯されたタオルやシーツの清潔な匂いを嗅いだ途端、目を瞑りながら、へああ、またヴァッパターールの住まいにいるん

だ」と実感した。すでに夢うつつの頭にふと浮かぶのは、昔見た「夏の嵐」というイタリア映画。情熱的なイタリアの貴婦人が、多分ナポレオン戦争の頃だろう、オーストリア兵の美男子と恋に落ちる。しかしこの男はほんの遊びのつもりだった。別の女性と会っているところを見つけれ、男はその場で貴婦人をこっぴどく侮辱する。それも、一度でも親密になったのなら、そこまで言う必要はないのと思うほどひどい言葉でだ。するとその貴婦人は復讐にと、この男が脱走兵であることを上層部に密告。男が銃殺される音を聞きながら、建物の塀の外を当て所もなく歩きつづけるところで映画は終わる。——わたしの脳裏にあったのは、二人っきりのとき、その男が貴婦人に言った台詞だ。「想い出すことはほんの些細なこと、例えばこの部屋の蠅の羽音」。本当に想い出すのは、より多く些細な音や匂いなのだ。

夜中に目が醒めた。気がついてみると、住まいはきれいに掃除され、多分ドロテーの庭からのだろう、赤い紫陽花が居間のテーブルの上に飾られ、歓迎のカードも何枚か。それに、もう早々と、九月末のドロテーの誕生パーティーへの招待状もあった。そしてさらにゼミナールで知りあったウータ・R夫人からはデュッセルドルフに関する日本語資料と温かい手紙も届いていた。もちろんキッチンには、家主夫人に代わって家政婦のヴェムバー夫人が整えてくれた果物類（林檎、バナナ、桃、キウイ）、コーヒーや紅茶、それに冷蔵庫にはドイツの全粒パン、ハム類、バター。そしてドロテーからはラズベリー・ジャムとドイツの肉スープがたっぷり一人前届いていた。空腹に気がついて、そのスープを半分戴いて、なんとも幸福な思いでふたた

び眠り込んだ。――

夜が明けて、あのバルコニーのカーテン越しに、半年ぶりに朝靄に煙る森のような「庭」を目の当たりにしたとき、つくづく「どんなに苦労しても、やって来た甲斐があった」と思った。ここを離れるときにはいまだ葉が落ちたままだった木々は、豊かに葉をつけ、見るとどの木も実をつけている、黒いのや、赤いのや、紫の実。あの雀はもうここには住んでいないのだろうか。いや、やはりキッチンから見える大きなニワトコの木の中で、紫の実を突ついたりしている。ククーツ、ククーツと低い声で鳩も鳴く。白黒で、尾の長い美しい鳥もバルコニーに降り立ったりする。カササギだ。

この日は午前中に早速カウフ・パルク（買い物公園）で食糧を買い込んだあと、ドロテーに日本からのお土産を届け、そのまま彼女が取り寄せてくれていた市の文化行事の資料と一緒に検討。そして午後からは街のテュイ旅行代理店へ幾つかの旅の予約をしに行った。



ヴッパータールの住まい

病院から電話を入れてきた家主夫人、昨年はあんなに「あなた、夏こなきゃ駄目ですよ」と言っていたのに、今度は「あなた、またクリスマスにこなきゃ駄目ですよ」。そして三日後に退院してきて、わたしの顔を見るなり、「今度はいつ来るんです？」

連日三四度C以上の夏の日本に暮らしていると、へあのヴァータールの住まいも、居間はさぞ空気が籠り、ムツとして暑苦しいだろうとしか考えられないが、来てみるとデュッセルドルフの気温が二〇度Cほど、朝夕はもっと冷え込む。むしろ暖房が入っていないだけ、住まいはさわやかだ。いや、驚いたことに、居間には弱い暖房が入っていた！ 受け入れ教授の第一声、「今年の夏はひどいんですよ、雨と寒さでね」。でもわたしが到着してからはいつも快晴だし、それでいて肌寒いものだから、酷暑に悩まされてきた日本人としては有難くて仕方がない。葉蔭からこぼれる陽の光が金色に輝くのを眺めていると、晩年のヘルダーリンの断片「黄ばんだ葉のうえに」を想い出す。

黄ばんだ葉のうえに

葡萄が ワインの希望が安らう。そのように頬のうえに

乙女の耳に垂れた

金色の耳飾りの影が安らう。

止まっていた時計がそこから突然また動き出したように、というよりもむしろ、時計が止まってしまったようにと言うべきか、ともかくわたしの二度目のヴァン・タール滞在が始まった。

市民ホールでの合唱コンサート

八月二十七日の明け方、到着して以来初めての雷雨。バリバリッと音がしたと思うと、ザーという雨の音。だがこの降り方は、昨年十月に経験したのとは違う。やはり夏の雷雨だ。いつもは朝日に輝く庭は、今日は雨に煙っている。午前中は降り止んでいたもので、もう上がったのかと思っていると、昼前頃からまた、しかも結構強く降り始めた。と、昨春秋、日曜日でコンサートがある日という、よく雨が降ったのを思い出した。あのアネ・ゾフィー・ムターのヴァイオリン・コンサートでの失敗！ ドロテーからレイン・コートを借りようか、コンサート用に買った黒のエナメル靴は手にもって行こうか、などと思いついておうちに気が滅入り、午後三時頃からベッドに入ってしまった。一時間半ほど眠ったろうか。目が醒めてみると、有難いことに雨は止んでいた。そそくさとアーベント・ブローツ（夕食のパン）を食べ、洋服もバッグも靴も黒ずくめにして、まだまだ明るいなかをバスで市民ホールへ向かった。七箇月ぶり、帰国直前の一月二十五日に、ヴァン・ターレン交響楽団によるベートーヴェンの交響曲第九番を聴いて以来のこと、最初のコンサートから考えると、ほとんど一年ぶりである。

夏休みだというのに、というよりもむしろ長い間コンサートが休暇だったせいだろうか、市民ホールは外まで人が溢れていた。夏だからか、服装は全く黒一色というわけではなかった。アーベント・カッセ（当日券売り場）でドロテー・Wの名で予約されているティケットを四五マルクで受けとって、今回は座席は一階正面席（パルケット）なら三列から十八列内で自由に選べることになっていたのだ、わたしは昨年イレーネ婦人に教わった通りに三マルクでプログラムを買ったあと、七時半に大ホールのドアが開くと同時に、第六列目中央左端の席に陣取った。端を選んだのは帰りを急ぐからだだったが、それでもこれは依然としてとてもよい席で、ソプラノはわたしの真向かいで歌った。出し物は、メンデルスゾーン姉弟のカンタータのあと、ヨーゼフ・ハイドンのパウケン・メッセ（ティンパニー・ミサ曲）、歌詞は「キリエ・エレイソン」に始まるラテン語だった。一八一年からの伝統をもつヴァンタール・コンサート協会合唱団とケルンの室内楽オーケストラにより、指揮は何と女性で、ケルン音楽院に学んだというブラジル系のマリディー・ロゼットー女史だった。女性の指揮者はきわめて稀である。さすがにハーモニも素晴らしく、何といってもソプラノのクリスティアーネ・オエルゼの詠唱が美しかった。途中で間違えて拍手を送る人びとがいたのには安心した。

市民ホールの座席に座ってはじめて、今回の滞在がこの前のヴァンタール滞在に、七箇月の空白がなかったかのように繋がった。

デュッセルドルフのベンラート城

ヴッパータールの住まいに到着したとき、ウータ・R夫人からすでにお使いが届いていた。早速彼女に電話でこちらに着いたことを知らせると、八月二十九日の午後三時から自動車で約束のデュッセルドルフ見物に行きましょう、と申し出てくれた。ドイツでは夏は夜九時頃まで明るいので、そんな時間からでも十分市街見物ができるわけだ。

当日の午後三時少し前、そろそろ彼女が見つけやすいように住まいの前に出ていようと思っている、もう呼び鈴が鳴った。飛ぶように階下へ下りて行ってドアを開けると、そこにウータが、黄色に白いレースのヴェトナム風のドレスを優雅に着こなし、やはり金色の軽いシューズを履いて、蘭の花のように艶やかな顔に笑みを浮かべて立っていた。再会の挨拶をし、車の中に入ってから日本から持参したわたしのエッセイ集（ドイツ語要約つき）や、ちょっとしたお土産を手渡すと、とても喜んでくれた。それからデュッセルドルフへ向けて出発。彼女は、自分には考えがあって、美術館などはいくらも一人で行けるだろうから、今日は一人では見られない所、見落とす所を見て回りましょう、とわたしにとってはこの上もなく有難い提案をし

てくれた。

S 電車だと三〇分もかかるデュッセルドルフは、車だとほんの十五分なのだ。その間お話しするうちに、彼女とわたしは、やはり（というのはドロテーもそうなので）ほとんど同じ年齢だということが分かった。単に大学の成人教育にでも参加しているのかと思っていたら、とんでもない、正規の学生で、すでに修士号を取得、今は博士号を目指しているとか。彼女は面白いひとだ。娘時代には、別に「解放女性」を目指していたというわけではないのだが、ともかく自分のしたいことをしようと考えて、いまだその教育も受けないうちからジャーナリストになりたくて、まず「シュピーゲル」誌へ行ったとか！　そしてそこで「まず最初は地方新聞からお始めなさい」と忠告され、実際しばらく地方新聞のジャーナリストとして働いていたのだそう。そのほかにも英語を教えるなど、十六年間いろいろと仕事をして、三十三歳で結婚と同時に働くのを止め、デュッセルドルフを離れてゾーリンゲンに移り住むようになったの。と。ゾーリンゲンは小さな街だけに旧弊固陋だそうで、それに御主人の事業の関係で家には誰か彼かが出入りし、心理的にムシクシヤしたり気が滅入ったりすると、いつも生まれ故郷のデュッセルドルフへ出てきて旧市街の人びとと言葉を交わすのだそう。そうすると気分がスツキリするという。デュッセルドルフっ子の彼女は、わたしにとって大切なヴァンパイターを、事もなげに「嫌な街」だと言う。話の途中で「継娘」（シュテューブ・トホター）という語が飛び出したので、彼女の御主人は彼女とは再婚なのだと分かった。